

猫^マ
々^オ
々^マ
！^オ

昔々、文明がちよつとだけ発達した頃。

治水に長け、民達に慕^{した}われる王が統治^あしているある国。
その国には、物語を語るのが好きな或る少女が住んでいました。

ここは国のみんなから慕われる王様が治めている国。

土壁や藁葺きの家が建ち並ぶ中、貧しそうな家には似合わない、きちんとした身なりの一人の少女が、大切そうに布にくるまれた何かを収めた籠を持ち、立て付けの悪い扉の向こうへと声を掛けています。

「それじゃあお兄ちゃん、ファイ、行ってくるね」

中から行つてらっしゃいという声が聞こえるのを待ってから、少女は家の前から離れ、街の中心へと足を向ける。

歩く度に微かに聞こえる、じゃらじゃらと言う音。

少女は音を立てる籠をしっかりと抱きしめて、街の中心にある、色鮮やかな彩色をされた豪華な建物へと入っていく。

彼女の名前はマオ。天性の物かはわからないが、玉の鑑定眼を見込まれ、宮廷の中へ美しい玉を売りに行く事を許された、玉の商人だ。

宮廷の門番に通行を許可する旨が書かれた竹簡ちくかんを提示し、中へと入るマオ。

鮮やかな彩色と、光を入れる為の透かし彫りが施された壁に囲まれた廊下を歩き、向かった先は宮廷お抱えの占い師達が控える部屋。

マオが売る玉は、占いを執り行う乙女達に甚く好評だ。

マオに任せれば美しい物を選んでくれる。それも人気の要因だが、もう一つ、乙女達を喜ばせる理由があった。

「マオさん、私にお勧めの玉は有る？」

「ジュウファ様にお勧めの玉はこちらです。」

柔らかい緑色の物がお好みでしたよね？」

柔らかい布で出来た占い装束に身を包んだ乙女に訊ねられたマオは、籠の中から、まるでとろけてしまいそうに柔和な緑色の、真ん中に穴の開いた円盤状の玉を取り出す。

それを受け取った乙女は、何かを期待するように玉を撫で、マオにまた訊ねた。

「この玉には、どんなお話があるの？」

その問いにマオは、優しい緑色を象徴するような、優しく甘い、乙女達の胸を躍らせる、短い物語を語る。

マオが宮廷に玉を売りに来るようになってから久しいが、始めの内は普通に玉を売るだけだった。

けれどもある日、何となく売っている玉に即興で物語を作り、それを

語つて売るようになってから、美しい玉だけで無く、ときめくような娯楽を求める占い師の乙女達に、物語を請われるようになったのだ。

代わる代わる、マオの元に来ては玉と物語を求める乙女達。各々玉と物語を手に入れて、うっとりとして居る中、最後にマオの元に来たのは、占い師の長である、マオよりも少し年上のユエという少女。

ユエも、マオにお勧めの玉はどれかを訊ねる。

マオは、緑色の玉が多い中から、所々黒っぽい部分が混じっている玉を取り出し、ユエに渡す。

本来なら、黒っぽい玉は質が良いとは言いがたい物だ。けれども、ユエは黒い玉を好む。

いつの事だったか、それを不思議に思ったマオがユエに理由を訊ねた時の事。ユエは、自分が秘めている恋心を、少しだけマオに話した。

詳しい事はマオにはわからなかったが、黒い玉を見ていると、思い人が側に居てくれるような気がする、ユエは言っていた。

それ以来、黒くとも美しい玉を、マオは持ち込むようになった。

マオはまだ恋を知らない。けれども、黒い玉とその物語を受け取り頬を染めるユエを見て、恋は女性を幸せにする物なのだと、ぼんや

りと思っていた。

その日の営業を終え、宮殿から帰ろうと占い師達の部屋から出たマオに、声を掛ける者が居た。

なにごとかと思つたら、この宮殿と国の主、兎王^うがマオと話をしたいと言う。

もしかして、販売許可が取り消されるのかとマオは怯えるが、王自ら呼び出しをかけているのだ、応えなくてはいけない。

布に包まれた、残りの玉が入った籠をぎゅっと抱きしめ、マオは玉座の間へと案内されるままに付いていった。

広く豪華な彫り物が施された色鮮やかな部屋。兎王の前へと馳せ参じたマオは、緊張した面持ちで挨拶をし、兎王の言葉を待つ。

跪き、礼をしたまま目を瞑っているマオに、兎王が優しく声を掛けた。「そんなに緊張しなくても構わないよ。」

実は、占い師達から君の話を聞いてね」

やはり、営業許可を取り消すつもりなのだろうかと膝が震えるが、

怯えるマオの思いとは裏腹に、兎王はこう言った。

「玉に物語を付けて売っているんだって？」

実に面白い試みだね。

試しに、今君が持っている玉の中で一番良い物に、物語を付けて聴かせてくれないかな？」

「あっ、か、かしこまりました！」

緊張で震えるマオの手。細く華奢な指が布を捲り、中に入っている玉をまさぐる。

薄緑色の玉、青い玉、黄色い玉、紫色の玉、黒っぽい玉、様々な玉が入り交じる中、マオは迷わずに、深い緑色をした、それでいて透き通る瑞々しさを持った小さな玉を取り出し、両手で捧げ上げ、震える声で物語を語った。

その物語は、かつて、渴き切り実りの無かった土地に、水と実りをもたらし、人々を救った神獣の物語り。

短いけれども素朴で美しい言葉で綴られた物語りに、兎王は膝を打つ。

「素晴らしい！」

君は玉を見る目だけで無く、その様な才まであるのか。
良かったら顔を上げて、名前を聞かせて貰えないかな？」

予想外に好評な様子に、マオは恐縮しながら、顔を上げ、兎王の方を向いて名乗る。

「マオと申します」

緊張で心なしか瞳を潤ませるマオに、兎王が言う。

「マオというのか。」

それではマオ。君の才を見込んで頼みたい事がある。

後宮に入り、私が所有する宝物に物語を付けて欲しい」

突然出された後宮入りの申し出に、マオは戸惑う。

後宮入りは、入った後の豊かな暮らしぶりから、国中の女達の憧れだ。後宮に入れば、自分や兄と弟達家族は何不自由なく暮らせるだろう。

けれども、入ってしまったら家族と離れなくてはいけなくなる。

自分を大切にしてくれる兄に、良く懐いている弟。その二人を置いて、後宮に入るのは躊躇われた。

マオは答える。

「後宮に入るかどうかは、家族と相談させて下さい」

この答えを兎王は咎める事も無く、良い返事を待っている。と言って、マオを家へと帰した。

兎王の御前に出た事で緊張極まっていたマオは、家に帰り着くなりへたり込んでしまう。

「マオ、お帰り。どうしたんだ、そんな所に座って」

そう言っマオを迎えたのは、兄のリュウ。

普段、玉の採掘を仕事としているおかげでがっしりとしているその体で、マオの事を抱え上げ、座る為の敷布が敷かれている所まで運び、座り直らせる。

すると、家の奥から弟のファイも出てきてマオの所にやって来た。

「どうしたのお姉ちゃん。顔色悪いよ」

マオの顔を覗き込んで、心配そうなリュウとファイ。その二人に、マオは魂が抜けたような声で言う。

「兎王様に、後宮に入らないかって言われちゃった……」

その一言で、小さな家の中は大きな騒ぎ声でいっぱいになった。

その翌日、散タリイウとファイに、後宮になんて入らないで欲しいと泣きつかれたマオは、後宮入りを断る為に、再び兎王の下へと参じた。

もしかしたら、断っても無理矢理後宮に入れられてしまうかも知れない。マオはそう思ったが、後宮入りを断られた兎王は、残念そうな顔をしてこう言った。

「ご家族がそこまで反対するのなら仕方ない。無理に後宮に入れとは、私は言えない。」

けれども、どうしてもマオ君の物語を宝物に付けて貰いたい」

「兎王様、ではどうしたら良いのでしょうか？」

「マオ君には、ここに通って貰って物語を付けて貰えたらと思う。」

この宮殿にこまめに通うのは大変だと思うけれど、ちゃんと物語りに対する対価は払う。

これでどうかな？」

「はい、それなら大丈夫です」

こうして、マオは宝物に物語を付ける為に、兎王の下へ通うようになった。